

銀行員は直接的な表現を避け、あいまいな言い回しを用いることが多いです。今回は前回に引き続き「銀行員の一言の真意」を読み解き、どのように経営判断に生かすべきかを解説します。

「次の決算書を見てからにさせてください」

銀行員に融資の相談した時、もしくは融資の審査が終わった後に「次の決算書を見てからにさせてください」と言われることがあります。この言葉は銀行員が融資を断るときの決まり文句の一つです。銀行員の本音としては「直近の決算書では審査は通らない、次の決算で業績や財務内容が改善されたら融資は出るかもしれない」という意味です。銀行員の言葉を真に受けて次の融資を期待してしまい、資金繰りがより悪化してしまう社長もいらっしゃいますが、大事なことは銀行員に思い切って聞いてみることです。

「役員報酬が高くないですか？」

決算が確定して、銀行に決算書を提出した際に銀行員から「役員報酬が高くないですか？」と言われることがあります。これは感覚的に雑談程度で言っている場合もありますが、本音としては「役員報酬を下げた方が良いのでは？」と考えている場合もあります。特に利益があまり出ていない会社や、リスクを検討している会社の場合は後者の意味合いが強いです。「会社の利益が出てなくて、資金繰りが厳しいのは社長の役員報酬が高いからではないか？」と思われ、まずは社長の役員報酬を下げてもらえないと、新規融資やリスクに応じられない場合があります。自社の状況から、現状維持か報酬引き下げをするかは慎重に検討してください。

「長期をご希望でしたが、短期の融資をお願いします」

例えば、返済期間5年で申し込んで、審査の結果「1年返済をお願いします。」または「5年ではなく3年返済をお願いします」と言われることがあります。これは返済期間を短くして、銀行側が貸し倒れとなるリスクを小さくするためです。こちらは2つのケースで考えてみましょう。

① 融資取引の無い銀行で融資相談をした場合

銀行は過去に融資した実績のある会社より、初めて融資を行う会社に対しては融資審査を慎重に行うものです。既存先では今まで融資を返済してきた実績がありますし、銀行が長い間その会社を見てきたことで、その会社の特徴や財務内容を把握しています。一方、融資取引の無い会社には返済実績はありません。決算書から財務状況や業績など表面的なことはある程度分かりますが、粉飾をされていることもあります。また「他の銀行で融資を受けられなかったために、うちの銀行に相談に来たのでは?」「本当に融資しても良いのか?」と慎重に判断をするため、まずは返済期間を短くして問題なく返済がされるかを見ようとします。

② 融資取引のある銀行で融資相談をした場合

もし前回まで長期の返済期間で借りられていた場合は、銀行から警戒されている可能性が高いです。過去と比較して業績や財務内容が悪化していないかまずは確認しましょう。会社の資金繰りを良くするためには、長期で借りた方が毎月の返済額は抑えられて良いのですが、その分融資残高が減るスピードが遅くなります。貸し倒れになった際に融資残高が少ない方が銀行としては良いので、業績や財務内容が悪い企業に対しては短期で融資をして早く回収をしようと考えます。

どちらのケースにおいても、「希望通りでないから借りない」という選択をしないのが得策です。新規の場合は今回で返済実績を積み、信用を積み重ねれば今回より次回の融資の時から期間を延ばしてもらえることもあります。既存先の場合でも、今後業績や財務内容の改善によって、融資条件を交渉できる可能性が高まります。